

2学期スタート、充実した学校生活を！

校長 尾後貫 智

31日間の夏休みを終えて、また学校に子どもたちの元気な姿が戻ってきました。夏休みは、各ご家庭で有意義な時を過ごされたことと思います。今日から学校では2学期が始まりました。昨日は、本日からアムステルダム日本人学校に仲間入りする新たな友だちが学校説明会に保護者の皆さんとともに来校されました。17名の新たな友だちを迎え、転入してきた子どもたちが1日も早く学校生活に慣れるよう全校で支援していきたいと思います。それぞれの学年で新しい転入生を巻き込んで、1学期以上に仲良く過ごしてほしいと思います。

さて、2学期は1年の中でも一番長い学期です。子どもたちの学校生活が充実したものになりますよう、職員一同努力してまいりますので、1学期に引き続き保護者の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

本日の始業式では、以下の話を子どもたちにしました。

31日ぶりに全員が学校に元気に登校して、始業式を迎えることができました。子どもたちと職員が全員無事故で新学期を迎えることができたことを私はとても嬉しく思っています。今日から新たな気持ちで学校生活をみんなでスタートしましょう。

さて、1学期の始業式では、アムステルダム日本人学校の校訓の話をしてみんなで頑張ろうみなさんをお願いしました。2学期は「充実」という話をしたいと思います。「充実」とはどういうことかみなさん、意味がわかりますか？「充実」とは、中身がぎっしり詰まった状態のことを表す言葉です。

では、「充実した学校生活を過ごす」にはどうしたらよいか。私からそのヒントをみなさんにお話しします。

まず第一に、自分のめあてをしっかりと持つこと

次に、みんなで協力すること

最後に、1日1日の学校生活を大切に過ごすこと

この3つが大切だと思います。特に自分が今しなければいけないことに全力で取り組むことが、充実した学校生活につながると私は思います。

では、12月の終業式では、2学期を振り返って、充実した2学期が過ごせたかどうか尋ねますので、1人1人が実のぎっしり詰まった2学期になるよう今日からスタートしていきましょう。

最後にみなさんにお願いがあります。今日から新たに17名の友だちがみなさんの仲間に加わります。それぞれの学年で、新しい友だちに優しく声をかけてあげてください。きっと最初はみんな心細いと思いますので、アムステルダム日本人学校の先輩として優しくしてあげてください。

『ティーチングとコーチング』

教育についてのとらえ方の一つにティーチングとコーチングがあります。ティーチング(教)とコーチング(育)を合わせて「教育」とする考え方です。ティーチングもコーチングも教育には不可欠な要素であることは間違いありません。

まず、ティーチングは文字通り教えることです。現代は「知識基盤社会」と言われています。この知識基盤社会に必要な知識・情報・技術は、これまでのように教師が知っていることだけを教えて子どもたちはそれを覚えていけばいいというわけにはいなくなってきました。なぜなら、子どもたちが活躍する未来は、今の大人の想定をはるかに超えたものになることはまちがいないからです。そう考えると、子どもたちに必要なものは、自分で課題を認識して、自分で方法を考え検証して解決していく力です。それを身に付けさせるのに必要な教育方法の一つがコーチングだと言われています。

学校教育では、小学校に上がったばかりの1年生にとっては当然ティーチングの部分が圧倒的に多いと思います。生活経験が乏しく、まして学習経験のない1年生に自分で考えるとか、自分で判断して学習を進めることは不可能です。て当然「教える」「教え込む」ティーチングによる基礎基本の定着の要素が多くなることは仕方のないことです。しかし、子どもがその成長と共に生活経験が豊かになり、学習経験を積み上げてくると、コーチングの部分が次第に多くなってくると思います。それは指示されたことだけをすればよかった学習から、与えられたものの中から自分で必要なものを選び、さらにそこから新しいものを創っていく学習、つまり自ら学んでいく能力が求められるようになっていくからです。

極端な話をすると、ティーチングで私が知っていることをすべて教えたとしても、子どもの知識は最大でも私とイコールにしかありません。それ以上の飛躍はありません。それを超えさせるのがコーチングだと思います。スポーツの世界では、現役時代に輝かしい活躍をしていなくても、指導者になってから名選手や名アスリートを育て上げる名監督や名コーチがたくさんいます。自分の現役時代をはるかに超えた選手を育て上げることができるのは、まさしく見事なコーチングの結果だと思います。

コーチングというと、何か難しい理論や方法があるように思いがちですが、要は子どもとどうコミュニケーションを取っていくか、どう子どもにかかわっていくかに尽きると思います。子どもが新しいことにチャレンジする時、自分で何かを創り出そうとする時、子どもの意見を引っ張り出していく。何か壁にぶち当たった時も、「ここが問題だよ」とは言わずに「何を問題だと感じるの?」と訊く。「何が問題かわからない」という答が返ってきたら、「理想は? 現実はどう? そのギャップは何?」と訊いていく。現状を認識していなければ「問題」を感じることはありません。人が問題として感じるのは、現状と理想のギャップを認識できた時だと思います。こうして問題を具体的に明らかにして、「その問題は何があれば解決できるの?」とさらに訊く。コーチングの最終ゴールは自分で問題を認識して自分で解決していく「セルフコーチング」ができるようになることだと言われています。それは、自ら問題を認識し、それを自ら解決していくことに他なりません。それをできるようにしていくには、親や教師が子どもに常に「なぜ」を繰り返す癖を付けてあげることだと思います。ですから、周りの大人が子どもたちに適切にかかわりコーチングしいかないと、子どもの力を引き出し、大きく成長させることは難しいと思います。ただ自由に時間と場所だけを与えて子どもに任せてしまうことを、心理学者の加藤諦三氏は次のように看破しています。

— 『自由に育てる』というのは聞こえがいいですが、実際には指導方法を知らない、ということが多いようです。 — 加藤諦三(心理学者)